

客観的なまなざしで支える、 持続的な成長への挑戦

独立社外取締役
伊奈 功一

トヨタ自動車株式会社の専務取締役生産企画本部長、
同製造本部長、ダイハツ工業株式会社の代表取締役社長を経て、
2019年より当社取締役。

当社の取締役会は、常に自由闊達に意見が言える雰囲気、多方面からの視点による指摘があり、大変良い議論が展開されています。指名・報酬諮問委員会も、他社の状況を参考にしながら当社の位置づけを明確にし、議論が実施されており、有効に機能しています。また、取締役会の実効性^{P40}については、取締役会事務局が課題を明確にし、今後の方針を整理している点が良いと思います。ただし、取締役会では経営計画の進捗状況や決議事項の実施状況のフォローがやや不足していると感じています。「振り返りと、その状況に至った要因分析」をより一層充実していただきたいと考えています。

当社の強みは、電源機器においては個々の顧客の要望にきめ細かく対応できている点、半導体では機動的に対応できるSiCパワー半導体を有していること、そしてこの両者を開発・設計・製造していることによって、パワー半導体が電源機器にどのように使われているかに精通している点です。しかし、この強みは競争相手との相対的なレベルで変わってきますし、顧客はその強みを当然のこととして期待し、さらにその他の要望も抱えているかもしれません。受注時、失注時、および当社の製品を使用していた

だいた際には、顧客の生の声を素直に聴くことが重要です。その都度振り返り、何が良くて何が悪かったか、そしてその要因について徹底的に分析することで、顧客にとっての当社の強みや弱みが明確になります。「顧客から当社を客観的に観る」ことが必要です。

当社の競争相手は日々進化しており、さらに米国の関税政策をはじめとする世界的な状況は大きく変化しています。このような時こそ、顧客から観た当社の強みを理解し、その強みをさらに進展させる成長戦略を、取締役会でより一層活発に議論できればと考えています。

当社は今、経営的に大変厳しい状況です。この状況を打開するための最も重要かつ信頼できる資産は従業員です。全従業員の個々の能力を最大限に発揮していただき、組織の活性化を図ることが肝要です。このような環境づくりや仕組みの構築は社長をはじめとするトップの方々によって進められていますが、私自身も社外取締役としてできる限り寄与していきたいと考えています。

このことが、「企業は、投資家からは資金を預かり、従業員からは人生を預かって、社会に貢献する」ことにつながると信じています。

